

「青い煙」の形象

—教材「ごんぎつね」最終文の解釈—

安 直 哉

— はじめに

国語教育における本格的基礎理論の一つに形象理論がある。形象理論は、垣内松三によって大正末から昭和初期に提唱された教材研究論である。拙稿において、形象理論が、その根幹的機能として、レトリックでいう「換喩」の働きを有していることを明らかにした。換喩とは、「隣接性（縁故）にもとづく比喩」であり、赤い頭巾をかぶっている女の子を「赤頭巾ちゃん」と呼ぶのが一例である。「隣接性」はなにも空間的なものに限定すべきではなくて、時間的なもの（継起性・共存性）も、観念的なもの（百科事典的知識）も含んでいる」ため、どこまでが隣接（縁故）かという限定がつけられない。制限がない分、作者の表現や読者の理解において裁量の幅が格段に広がる。そこに芸術性や想像性が関与する余地を生む。

本稿では、小学校四年生の定番教材「ごんぎつね」の最末尾の

文である「青い煙が、まだ筒口から細く出てゐました。」に絞つて、換喩が文学形象を形成する有効な機能となり得ていることを帰納的に論じていきたい。

「青い煙」は彼岸と此岸の両面に映る。「青い煙」に付託される意味づけは、死と生のライン上に位置する。これまでの教材論の多くは死へのベクトルに着目する。結論から言えば、このベクトルは本作品を〈ごんの物語〉として読んだ場合に生じる。その一方、生へのベクトルに刮目する教師もいる。このベクトルは本作品を〈兵十の物語〉と読んだ場合に見えてくる。なお、〈ごんの物語〉と〈兵十の物語〉という用語および発想は新規のものではない。既に浜上薫によって、本作品の構造は「ごんぎつね」の物語と兵十自身の物語の二重構造である」と読み解かれている。本稿では浜上のこの二重構造論に依拠しつつも、「ごんぎつね」解釈史の展開に即して整理する関係上、〈ごんの物語〉と〈兵十の物語〉に分けて述べていく。

まずは死へのベクトルを読み取る論、次に生へのベクトルを読

み取る論の順で考察していこう。

二 「ごんの物語」——死へのベクトル——

二一 西郷竹彦の教材論

西郷竹彦は、東京都武蔵野市立第五小学校六年二組において、「文学の科学」という実験授業を行った。その記録をまとめたのが西郷竹彦（一九六八）『教師のための文芸学入門』である。同書は、教材「ごんぎつね」の授業を通じて、文芸学の基礎（特に視點論）を解説するものとなっている。

「ごんぎつね」の最終文について、西郷は次のように述べている。

つつ口から立ちのぼる青いけむりの美しさは、なぜか、ごんと兵十というこの悲劇の主人公たちにさざげられた手向け
の香華であるかのように思えてくるではありませんか。

「手向けの香華」とは葬送の際の香華であり、死の儀式である。筆者も、「ごんぎつね」という作品に通底する深層的素材を「死」と読み取る。序盤におけるうなぎの死、前半における兵十のおつかあの死、そして終盤におけるごんの死へと、死が周辺の出来事から核心的事件へ近付いてくる。うなぎの死などささいなエピソードであろう。しかし西郷はそこにも意味を見出ししている。

「うなぎがごんの首にまきついたまはなれませんでした」という形象があります。これはさいごにごんが死ぬこととなんらの因果関係もありませんが、なぜかわたしたち読者には、ごんの不幸な悲しい最期を暗示し象徴している形象のように思われてきます。（象徴は作者が意識しているときと意識していないときがあります）なぜそうなのかと問われてつじつまのあう説明をできる性質のものではないのです。にもかかわらず、そういうものとして受けとったとき、その形象が意味ぶかいものとしてうかびあがってくる、またそう受けとったほうがおもしろくなるというのが象徴というものなのです。

「ごんぎつね」は最初、雑誌『赤い鳥』に投稿された。その草稿が新美南吉の綴ったスバルタノートに残っている。スバルタノート「権狐」では、ごん（権）の洞穴の入口に置かれた鰻が次のように描写されている。

鰻のつるつるしたはらは、秋のぬくたい日光にさらされて、白く光つてゐました。

鰻の白い腹と、葬列の「白い着物」とが、「白」という色彩で連結している。鰻の「死」と葬列の「死」が、「白」という色彩を介して繋がってくるのである。（ただし『赤い鳥』所収の「ご

ん狐」では、「うなぎの頭をかみくだ」¹⁾ いているが、「権狐」では噛み砕いていない。しかし、日光にさらされた鱈はいずれ死ぬであらう。」「何気なく置いたそのうなぎが、実はこの物語りの悲劇の発端をなしているのだ。」との指摘は的確である。

日本の読解指導の主流を形成してきた解釈学でも、作者の意識下に沈んでいる意図まで読み取る態度を支持する。この旨は古くは垣内松三によって、「作者の理解した以上に理会するといふことが真の理解であると思ふのであります。(中略) 作者が理解した以上に理会することは、許されるのであります。作者の意図以外に解釈することは許されません。作者が言はんと欲すること、作者が充分に云ひ表はし得なかつた所をも明かにするのが、解釈学的立場でありまして、(以下略)」と論じられている。形象的統一が担保される読みの追究が、教室では優先順位を占める。西郷は「青い煙」について再度触れている。

たちのぼる「青いけむり」の美しさは、兵十とごんという人物の両者に対する語り手のつきぬ痛恨の思いを象徴するものであり、殺し殺されるという現実的には血なまぐさい事件とその当事者たちの姿をいかにもあわれに悲しい美しいものとしてみなしている語り手の思いを象徴しているといえましよう。²⁾

死や殺害という残酷な事件であっても、それを文学として描き

切ったときには、悲しくも美しい余韻がそこはかとなく残る。美を描く文学の文学たる所以であらう。この原理は児童文学であってもなんら変わることはない。

「青い煙」を「香華」と見、その立ち昇る様を「あわれに悲しい美しいもの」と見る西郷の解釈は、その後の識者の解釈に強い影響を与えていく。それはもちろん西郷の解釈の完成度の高さによって来る。しかしその一方、別の力も働いた。

国語教師の多くが参考にする文献に、各教科書会社が制作する、教科書に準拠した教師用学習指導書がある。光村図書が一九八三年に発行した『国語 4年 学習指導書』の「「こんぎつね」の「学習指導の展開例」中の「指導法の具体案と留意点」には次のように書かれている。

青い煙が立ち上る様子をイメージさせたい。この表現から感じることを自由に話し合わせたり、書かせたりしていく。「青い煙」から線香の煙とイメージをダブらせる子、ごんの昇天ととらえる子など多様であらう。いずれにしても、作品の余韻に浸り込ませていくようにしたい。³⁾

西郷が「香華」つまり仏前にそなえる香と花の換喩と見なしたのに対して、光村図書は「線香」に限定している。「煙」から「華(花)」を連想するには多少の飛躍がある。「線香」と限定したことにより、この換喩はより説得性を増し、多くの研究者・教

育者に支持されることになる。

一例を挙げる。甲斐睦朗はこの最終文の表現について次のように解釈する。

撃つてすぐなので、煙が出る。しかし、その煙がごんの死を弔うための線香の煙のような感じをもつ。「ごんぎつね」最大の余韻表現。「バタリとたおれる」「目を落とす」「バタリと取り落とす」と下へ下へと下降していた視線が初めて青いけむりになって上昇する。線香の煙を暗示している。

兵十の視線の動き（「下へ下へ」とは対照的に、「青い煙」は上へ上へと上昇する。これはごんの昇天をうらなっている。図らずも「死へのベクトル」となっている。

二― 西郷以降の教材論

川野理夫は次のように述べる。

「青いけむりが、まだつつ口から細く出ていました。」というむすびの一文は、まことに象徴的だ。描写されているのは「青いけむり」である。「赤」や「黒」が、強かさかんなさまを象徴するのに対して、「青」は、いかにも弱くはかない感じである。そのうえ、本文では、「青い」とかざられるものは、たちまち空中に消えてしまう「けむり」なのである。そ

のけむりは、「まだ」〈細く〉出ているのである。「まだ」はもうじき終わることを告げているし、「細く」もたいへん弱々しくたよらない感じだ。

「細く」ではあっても「まだ」生きているごん。しかし、それとて「まだ」はもうじき終わることを告げている」とおり、もうじき死ぬことを暗示している。

川野は「青」という色彩に着目している。色彩への関心は授業の発問・指示にも表れている。

「青い」と「赤い」「黒い」とをならべて、それぞれがあらわす感じのちがいを話し合わせ、整理してまとめてやる。

「ごんぎつね」の基調となる色彩は赤である。冒頭部に既に「つるしてあるとんがらし」の赤が登場する。「赤い井戸」のある兵十の家から出棺した隊列は「赤い」ひがん花をふみ折つて墓地に着く。なお、「ひがん花」は「多くの地方で別称（死人花など）を持つ「不吉な花」である」。ここでも「死へのベクトル」は換喩として予兆されているのである。そして、クライマックスで流れるのがごんの赤い血である。府川源一郎は言う。

読み手の意識の中で、「赤い」世界は「ごんぎつね」の底流を流れる色彩イメージを作っている、といってもいい。（中

略)最後に兵十に撃たれて横たわることのむくろから流れ出したであろう「赤い」血も、そうした作品の基調イメージとどこかで連関しているかもしれない。

「強くさかなさまを象徴する」赤と比較して、川野は「青」は、いかにも弱くはかない感じである」ととらえる。川野は「青」に「弱くはかない」感覚を抱くのであるが、そうした感覚が発生するメカニズムをより詳細に論じた例として中西一弘の分析が挙げられる。

火なわじゅうのけむりが果たして「青い」のか、事実は知らないが、「青い」という鮮明な単色を用いている言語表現が、けむりの存在感を鮮やかに示すものとなっている。けむりが鮮明になるのに比例して、読者はごんの死をこの上なくはかなく思っていくのである。

「青」は「けむりの存在感を鮮やかに」するための効果表現であって、「はかない感じ」をいだかせるのは、あくまでも「けむり」によってであるという。

色彩に対する感覚も場面の状況に依拠する。筆者は、このクライマックス場面で配置された「青」に対して「鮮やか」さのみでなく、さらに付加された感覚を持つ。それは言うならば、清冷なイメージである。清冷な青は、生命の象徴である(血液の)赤と

の対照性をより引き立たせるからである。

中西の論に戻る。氏は最終文を詳細に分析する。

○死を直接もたらした火なわじゅうの部分(つつ口)を取り上げ、死の印象を持続させながら、けむりの姿をいよいよ具体的に表現して、はかなさを浸透させていく。

○死との連想が強いけむりを、「細く」と表現することでごんの死とも重ね合わされ、ここでもはかない感じが強められていく。

○最後は、「出ていきました。」で締めくくられている。けむりが出てくるのだから、それは、いかに細くとも、上に向かつて延びていくであろう。そう読者は想像するにちがいない。「ようし。」以降、上から下への構図で作られ、目は、兵十も読者も、下へ下へと向かっていた。それが、最後の一文に至って、逆に、上へ向かって昇っていく。青い鮮明な色をもって、細く。読者の感傷を誘ってやまないけむりが、これまでに形作られた空間の中を一筋だけ、逆の方向に上がっていく。

「つつ口」に着目し、それが「死の印象を持続させ」ているとの指摘である。銃口が殺戮を連想させるのは首肯できる。

それとは別に、中西の論述には重要な心性が含蓄されている。中西はなぜ「死との連想が強いけむり」と言い得たのか。なぜ

「けむり」から「死」が連想できたのか。まず思い浮かぶのは『徒然草』の次の一節である。

あだし野の露消ゆる時なく、鳥部山の烟立ち去らでのみ住みはつる習ひならば、いかにものあはれもなからん。²²

「鳥部山の烟」とは火葬場のけむりのことである。想像を逞しくするならば、中西は無意識のうちにも「けむり」から火葬を連想していたのかもしれない。

また、鶴田清司は〈分析〉の手法の一つである「対比」を援用して次のように述べる。

なお、ラストシーンの〈青いけむりが、まだつつ口から細く出ていました〉という描写は、その前の〈ドンとうちました〉(〈 배터리とたおれました〉(〈 배터리と取り落としました〉)という描写と対比されている。つまり、〈青いけむり〉という色彩語・イメージ語に代表される「視覚的イメージ」「嗅覚的イメージ」と〈ドンと〉(〈 배터리と〉)というオノマトペに代表される「聴覚的イメージ」の対比である。そこには、動の世界↓静の世界、音響の世界↓沈黙の世界という転換が見られる。²³

「静の世界」「沈黙の世界」とは、ごんの死とあいまって葬送の

儀式を象徴している。「ごんぎつね」では、おっかあの死の場面でもって葬儀が実態的に描かれ、反復的効果を伴いつつ作品末において葬送の儀式が象徴的に連想される。物語全体が死へのベクトルで覆われ、葬送の儀礼が繰り返されるのである。

三 〈兵十の物語〉——生へのベクトル——

三——早川典宏の教材論

前章の解釈とはまったく異なる視座を持つ教師がいる。早川典宏である。「青い煙……」の文に対して早川は次のように述べる。

この「けむり」を、どう感じるか、感覚としてとらえたものを、まず出し合いたい。／子どもたちは、「かわいそう」「さびしい」等というだろう。私ならば、どうであろう。まささきにかぶものは、「なまなましさ」である。破局のなまなましい余韻であり、これから、はじまる兵十の生きざまへの予告としての「なまなましさ」でもある。なぜ、そう思うかわからないが、兵十は私であるかもしれない。これは、私の主観であるから、子どもにいう必要もないことだ。²⁴

「青い煙」を「なまなましさ」ととらえる。早川自身「なぜ、そう思うかわからない」と言いつつも、「兵十は私であるかもしれない」とのヒントを与えてくれている。「ごんぎつね」の最終

場面の「その時兵十は、ふと顔をあげました。と狐が家の中へはいつたではありませんか。」の文章について、早川は「そこで、この本文は、すでに兵十の視点からのものであるから（西郷竹彦のいう「視覚の転換」）と記している。これまでずっとごん（またはその側ら）の視点で物語が進んできたが、ここに至って、ごんの視点から兵十の視点へと転換している事実を早川は承知しているのだ。最終場面において「ごんぎつね」は、「ごんの物語」から「兵十の物語」へと枠組みを拡大して変容を遂げたのである。それゆえに、早川にも「兵十は私であるかもしれない」と、兵十と自分を重ねて読ませる余地を与えることになった。

三好修一郎は、「ごんぎつね」が発心・縁起譚に依拠する構造を持ちながらも、後日譚——つまり兵十のその後の行動（剃髪する、神として祀るなど）——が欠落している点を指摘する。また現代（あるいは国際性）の立場から見ても、「兵十が、ちようど、ごんが穴の中で想像力を働かせたように、ごんの真実に自らの想像力や認識力を向けていくのは正にこれからである。」として、ごんの悲劇物語で終了する従来の読み方に駁論する。そのうえで「ごん狐」は、ごんのみに「読み」を焦点化するのではなく、兵十に寄り添いごんに問いかけることで、新しい「読み」の地平を切り開いていけるだろう。」と、「兵十の物語」の形成に教育的意義を見出している。まさに「これから、はじまる兵十の生きざま」が課題となる。これからの兵十の生きざまの「予告としての「なまなましさ」」を早川は「青い煙」から嗅ぎ取った。北の大地

に生きる生活者としての遅い人生観が滲み出ている。

兵十のその後の生き方に焦点を当てた授業としては、浜上薫の実践が挙げられる。浜上は、「ごんぎつね」のラストシーンの検討の後、「兵十が少しでも満足できるために、その後でできることを二つ考えなさい。」と発問している。解は「1 お墓をつくってあげたのではないか。↓村の墓地」と「2 村の人たちに「ごんはいいきつねだ」と伝えたのではないか。」となっている。いずれの解も、その後の「兵十の物語」の形成であり、兵十の苦悩の解消を図るものとなっている。こうすることで兵十の苦悩は多少とも和らぐであろうが、問題はそれが兵十の生き方、生活者としての兵十の変革にどう繋がるかである。

三——二 兵十は何者なのか

早川は「青いけむり」の場面形象は、（中略）生々しさを意味している」と、繰り返して「生々しさ」を意識する。それはなぜか。

「火縄銃」について、早川は「この時代、この種の武器を、百姓が持ち、しかも納屋にかけてあるということはどういうことだろう。」と疑問を呈しつつも、その解は記していない。岸本修二も、「赤い井戸」「小さなこれかけた家」「表のかまど」から貧しい農家である。しかし、鉄砲を持つていることから普通とは違う農家であるとも考えられる。」と言う。日頃から常に使用できるように火縄銃を整備しておき、とつさに発砲準備を完了させ、

一発で獲物を仕留める。いったい兵十は何者なのか。
スパルタノート「権狐」は次のような書き出しで始まる。

茂助と云ふお爺さんが、私達の小さかつた時、村にゐました。「茂助爺」と私達は呼んでゐました。茂助爺は、年とつてゐて、仕事が出来ないから子守ばかりしてゐました。若衆倉の前の日溜で、私達はよく茂助爺と遊びました。

私はいもう茂助爺の顔を覚えてゐません。唯、茂助爺が夏みかんの皮をむく時の手の大きかつた事だけ覚えてゐます。茂助爺は、若い時、狐師だつたさうです。私が、次にお話するのは、私が小さかつた時、若衆倉の前で、茂助爺から聞いた話なんです。(傍線引用者)

茂助爺は狐師だつた。茂助と兵十の姿とがだぶるとき、兵十の影がうつすらと浮かび上がる。兵十と茂助爺とは狐師仲間だつたのかも知れない。「こんぎつね」は兵十から茂助爺へ伝承された物語だつたのかもしれない。「終末部分では爺と兵十の像が重なつてきたりして、——もしかしたら、茂助爺さんが狐師としての若き日をダブらせながら語つたのかも——と想像する楽しみも出てきます。」という解釈も可能となる。

田中実や浜上薫の論を参考にするならば、次のような包含関係が見えてくる。つまり、〈兵十の物語〉が〈ごんの物語〉を包含し、〈茂助爺の物語〉が〈兵十の物語〉を包含し、さらには〈村

落共同体の物語〉が〈茂助爺の物語〉を包含するといった、重層的で入れ子型の包含関係が成立する。図1の通りである。

図1



兵十にはモデルがいるとされる。校定本の語注には次のように記されている。

兵十 当時、岩滑新田(現・半田市平和町一丁目七四番地)に、江端兵重が住む。「田鋤きの名人」と呼ばれた和牛使いの名手。魚とり、はりきり網漁(後出)、狩猟にも長じ、大雨の時は必ずはりきり網漁をしたと伝えられる。一九四〇年(昭和十五年)没。(傍線引用者)

兵重は、和牛使い・川魚漁師であるとともに狐師でもあった。兵十も狐師としての一面を持っていた可能性は高い。

在村鉄砲には二種類ある。一種類は鳥獣害対策用の空砲発射の威し鉄砲である。もう一種類が狐師用の狐師鉄砲である。兵十持参の火縄銃は、即座に実弾を発射できたのだから狐師鉄砲である。狐師鉄砲を持つているということは、すなわち兵十が狐師で

あつたことの証にはかならない。早川学級の児童が言う。

「兵十、てっぼう打つのは、うますぎるよ。」「いつばつで、ばたりだもの……。」

うまいはずである。兵十は猟師なのだから。(專業・兼業という現代的職業論の概念は不用であらう。兵十の仕事の一つに狩猟があつたと考えるのが自然である。)

仕事であるかぎりは、ごんの死後も兵十は猟を続けたであらう。動物の生命をいだけて自らの生活を営んでいた。狩猟者としての宿命である。しかし、引き金を引くときの意識は大きく変わったに違いない。隠居するまで続くその一瞬一瞬において兵十は変革を遂げたのである。

四 まとめ

「青い煙……」の文は換喩により、その意味世界が広がる。「ごんぎつね」を(ごんの物語)として読むと、「青い煙」は死への形象となり、あたかも手向けの線香の煙を象徴しているかのように読める。一方、「ごんぎつね」を(兵十の物語)として読むと、「青い煙」に「生々しさ」を見ることになる。生あるものと対峙する生々しさであり、さらには、兵十の今後の生き方の予告としての生々しさである。ごんの鎮魂のため、ごんの墓を建てたり、

ごんを語り継ぐことで兵十もごんもある程度の救済は得られよう。しかしその一方、兵十は猟師として今後も生活していく。「青い煙」は、狩猟者としての兵十を象徴していたのかもしれない。

いくつかの「ごんぎつね」教材研究論を読んだが、そのなかには「青い煙……」の一文にあまり重きを置かない教材論も散見できた。比較的軽く流して進めるといふ指導計画である。おのずとその理由も書かれていない場合が多い。そのなかにあつて市毛勝雄は理由を述べている。

小学四年生にとつて最後の死の場面は辛いところなので(中略)テキパキと授業を運ぶことに賛成する。ここを念入りに話し合せて、子どもに涙をこぼさせようとするのは悪趣味な授業である。

意図的に「子どもに涙をこぼさせようとする」教師はあまりいないであろう。文学教材を読む授業で大切なのは形象を観取することであり、本作品で形象の象徴性が最も顕著なのが、この「青い煙……」の一文である。授業で取り扱う意義は充分にあると思う。

現実的に問題なのは、ごんが撃たれる場面に関心が集中するあまり、子ども自身も「青い煙……」の一文にあまり注目しないことである(北吉郎・鶴田清司)。文学は事実を読む以上に形象を讀

む。文学教材の読解において、形象を読むべく教室をいざなうのは教師の力量にかかっている。

注

- (1) 安直哉(二〇〇九)「形象理論と倒語説」(『岐阜大学教育学部研究報告』人文科学) 58巻1号、二五三—二六二頁
- (2) 佐藤信夫(一九七八)『レトリック感覚——ことばは新しい視点をひらく——』講談社、一一五頁
- (3) 野内良三(二〇〇七)『レトリックのすすめ』大修館書店、六三頁
- (4) 作品題名の表記について。校定本では「こん狐」である。しかし、本稿は小学校四年生の教材研究を主旨とする論文である。よって引用文を除き、学年別配当漢字表の都合上「こんぎつね」と表記する。
- (5) 新美南吉(一九八〇)『校定 新美南吉全集 第三巻』大日本図書、一五頁
- (6) 浜上薫(二〇〇八)『「分析批評」で思考力を育てる』明治図書、三二頁
- (7) 西郷竹彦(一九六八)『教師のための文芸学入門』明治図書、一七三頁
- (8) 注(7)に同じ。一九八頁
- (9) 新美南吉(一九八一)『校定 新美南吉全集 第十巻』

大日本図書、六五一頁

- (10) 早川典宏(一九八七a)『授業のしたごしらえ こんぎつね 上巻』道民教出版、五七頁
- (11) 垣内松三(一九三三)「形象理論より見たる新読本」(『国民教育新聞社編』小学国語読本巻一 編纂趣旨と取扱)、九九—一二九頁) 一〇四頁
- (12) 注(7)に同じ。一九七頁
- (13) 光村図書(一九八三)『国語 4年 学習指導書』光村図書、三四四頁
- (14) 甲斐睦朗(一九九四)「「こんぎつね」の表現」(『実践国語研究別冊 一三九号 「こんぎつね」教材研究と全授業記録』明治図書、五一—四七頁) 四七頁
- (15) 川野理夫(一九八六)『教師の読み・「こんぎつね」』あゆみ出版、一一六頁
- (16) 注(15)に同じ。一一〇頁
- (17) 鶴田清司(一九九三)『「こんぎつね」の(解釈)と(分析)』明治図書、一五頁
- (18) 「こんぎつね・新美南吉の世界展実行委員会(出版年未詳)『「こんぎつね 新美南吉の世界展」の一四ページから一六ページにかけて、各社国語教科書の挿絵(昭和三〇年から昭和六一年)が選出されている。そのいずれにも、撃たれて横たわるごんの身体から血は表現されていない。教育的配慮からのものであろう。しかし、挿絵に血を描くか

どうかはそれほど重要な問題ではない。鉄砲で撃たれて流血するのは容易に想像できる。解釈作業には豊かな想像力が不可欠である。なお、筆者は最近「ごんぎつね」を蒔絵の絵柄とした手作りの帯留め工芸品を見たことがある。そこには、ごんと鉄砲と栗が描かれており、ごんの腹からは鮮血がどくどくと流れ出ている。現代工芸品の美的価値を論じる審美眼を筆者は持ち合わせていないが、これはこれとして強い印象を与える作品であった。

(19) 府川源一郎(二〇〇〇)『「ごんぎつね」をめぐる謎 子ども・文学・教科書』教育出版、五〇頁

(20) 中西一弘(一九九七)『文学言語を読む I 巻 「ごんぎつね」——書く立場からのアプローチ』明治図書、一四七頁

(21) 注(20)に同じ。一四七頁

(22) 木藤才蔵校注(一九七七)『徒然草』新潮社、二七頁

(23) 注(17)に同じ。一〇八頁

(24) 早川典宏(一九八七b)『授業のしたごしらえ ごんぎつね 下巻』道民教出版、八八頁

(25) 注(24)に同じ。七五頁

(26) 三好修一郎(一九九九)『新美南吉「ごん狐」の読みと教材性』(全国大学国語教育学会編『国語科教育』46集、一〇四—一一頁)一〇五頁

(27) 注(26)に同じ。一〇四頁

(28) 注(6)に同じ。八二頁

(29) 注(6)に同じ。八二頁

(30) 注(6)に同じ。八二頁

(31) 注(24)に同じ。九五頁

(32) 注(24)に同じ。七六頁

(33) 成家巨宏・岸本修二編(二〇一一)『「ごんぎつね」の授業』東洋館出版社、五頁

(34) 注(9)に同じ。六四九頁

(35) 小松善之助(一九八八)『教材「ごんぎつね」の文法』明治図書、八三頁

(36) 田中実・須貝千里編著(二〇〇五)『「これからの文学教育」のゆくえ』右文書院

(37) 注(6)に同じ。

(38) 注(5)に同じ。二七頁

(39) 注(24)に同じ。八〇頁

(40) 渋谷孝・市毛勝雄編(一九九〇)『授業のための全発問』11 小学校4年 文学教材——「つばき/ごんぎつね」明治図書、一〇五頁

(41) 北吉郎(一九九二)『新美南吉「ごん狐」研究』教育出版センター、一五四頁

(42) 注(17)に同じ。一〇八頁

主要参考文献（注に記したものを除く。）

塚本学（一九八三）『生類をめぐる政治——元禄のフォーク

ロア——』平凡社

永田喜久（一九八八）『ごんぎつね』の授業』桐書房

大西忠治編（一九九一）『ごんぎつね』の読み方指導』明治

図書

渋谷孝・市毛勝雄編（一九九七）『ごんぎつね』の言語技術

教育』明治図書

田中実・須貝千里編（二〇〇一）『文学の力×教材の力 小

学校編4年』教育出版

阿部英樹（二〇〇二）「幕末瀬戸内農村における鉄砲売買の

実態と特質——広島藩領安芸国賀茂郡黒瀬組の「鉄砲商

事」を事例として——」（『中京大学経済学叢書』13号、

四九—七八頁）

田村操・石川久子他・表現よみ総合法教育研究会編（二〇〇

五）『理解を深める 表現よみ 小学校国語4年（ごん

ぎつね）（一つの花）ルック

鶴田清司（二〇〇五）『なぜ日本人は「ごんぎつね」に惹か

れるのか——小学校国語教科書の長寿作品を読み返す』明

拓出版

山口憲明（二〇〇八）『ごんぎつね 教材分析と全発問』ル

ック

鶴田清司（二〇一〇）『「解釈」と「分析」の統合をめざす文

学教育——新しい解釈学理論を手がかりに——』学文社

浜本純逸監修・松崎正治編著（二〇一〇）『文学の授業つく

りハンドブック——授業実践史をふまえて—— 第2巻

小学校・中学年編／詩編』溪水社

（やす・なおや 岐阜大学准教授）